水曜通信35

2024年
2月

東北学院宗教センター編

第70回 水曜公開礼拝
2024年２月21日（水） 18：30－19：00

＜礼拝次第＞

前　奏：J.S.バッハ作曲
　　オルガン小曲集より
　　『おお人よ汝の大いなる罪を嘆け』BWV622

讃美歌：37A番「ゆうひはしずみぬ」

聖　書：ヘブライ人への手紙　11章8－22節

讃美歌：352番「あめなるよろこび」

説　教：「神の輝きの内に」

頌　栄：543番「主イエスのめぐみよ」

後　奏：J.S.バッハ作曲
　　コラール変奏曲
　　『恵み深きイエスを迎えん』BWV768Ⅰ・Ⅹ・XI

説教
宗教センターチャプレン
野村 信

奏楽・第2部演奏
礼拝オルガニスト
菅原 淑子

後奏の後、菅原淑子氏（礼拝オルガニスト）によるオルガン演奏による賛美を行います。

次回第71回水曜公開礼拝は2024年４月17日です。

第69回 水曜公開礼拝報告（説教：西間木 順、奏楽：椎名 雄一郎）

2024年１月17日（水）　18：30－19：00

讃美歌：39番「日くれて四方はくらく」
聖　書：ヘブライ人への手紙 11章8－16節
讃美歌：270番「信仰こそ旅路を」
説　教：「信仰によって生きる」
頌　栄：539番「あめつちこぞりて」

【説教要旨】

ヘブライ人への手紙11章には旧約聖書に登場する人物の信仰の歩みを挙げながら、「信仰」について教えています。神の召命を受けときアブラハムは神の約束が必ず実現すると確信し、「行き先も知らず」旅立ちました。アブラハムが目的地として見ていたものは「神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都」、「天の故郷」でした。アブラハムは「天の故郷」を目指して旅を続けたのです。私たちもまたアブラハムのようなこの世の歩みをしている旅人です。大切なことは、天の故郷を熱望しながら、また永遠の世界におられる、主イエスに目を注ぎながら、神の言葉を携えて与えられたこの世の旅路を歩むことなのです。　（榴ケ岡高校宗教主任　西間木 順）

前　奏：G.ベーム作曲　　コラールパルティータ〈ただ愛する神の支配にまかす者は〉
後　奏：J.S.バッハ作曲　〈ただ愛する神の支配にまかす者は〉BWV642

前奏、後奏ともG.ノイマルク作詞作曲の讃美歌21-454番〈愛する神にのみ〉に拠っている。彼はドイツ30年戦争時、海を渡りケーニヒスベルク (現在のロシアのカリーニングラード) の大学で勉強しようとするが、移動中に強盗に合い、無一文になってしまう。残された持ち物は先生の推薦状のみで、港町キールに着くが、当地で家庭教師の職を得て、勉学する資金も用意された。どのような時も神さまがともにいてくださることを歌った、ノイマルクの感謝の歌である。（文学部教授　椎名 雄一郎）

礼拝とその後の19時00分から30分までの椎名雄一郎氏によるオルガンによる賛美に68名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美（オルガン演奏：椎名 雄一郎）

1. G.ベーム作曲　　前奏曲　ハ長調
2. 讃美歌121番　　〈まぶねのなかに〉[教職員聖歌隊による賛美]
3. 讃美歌第二編152番　　〈ふるいものはみな〉[教職員聖歌隊による賛美]
4. G.ベーム作曲　　コラール・パルティータ〈おおわが魂よ、大いに喜べ〉
5. G.ベーム作曲　　前奏曲　ニ短調

ゲオルク・ベーム(1661-1733)は、中部ドイツのホーエンキルヒェンに生まれ、1684年イェーナ大学に入学し、1693年以降はハンブルクでイタリアとフランスのオペラに触れたと考えられます。1698年北ドイツ・ハンザ同盟都市リューネブルク・聖ヨハニス教会オルガニストに就任しました。コラール・パルティータ〈大いに喜べ、おお、わが魂よ〉は典型的なベームのコラール・パルティータ(変奏曲)です。冒頭のテーマはチェンバロ作品を思い起こさせるフランス風の装飾音が付けられており、続く変奏もベームの故郷である中部ドイツの変奏曲の技法を基にしながらも、その音楽はフランスのリュート音楽の影響もみられます。ペダルが活躍する《前奏曲　ハ長調》、《前奏曲　ニ短調》は、自由な部分と対位法的部分が交互に現れる北ドイツ・バロック時代の典型的な様式です。　（椎名 雄一郎）

宣教師たちの生涯と思想（11）
エルマー・ハロルド・ゾーグ先生の生涯と思想③ ― 結びにかえて

「神学部最後の教職員・学生（ブラッドショウ館前）」（東北学院史資料センター蔵、前列右３番目にゾーグ先生。1937年３月６日撮影と伝わる。）

1930年代は、東北学院の歴史における一つの節目の時代であったと言えます。第２代院長シュネーダー先生の辞任と逝去に加え、仙台神学校以来の歴史を持つ東北学院神学部が、他の神学校と合同する形で廃止されることになったからです。この神学部合同問題が生じた際に、最後の神学部長を務めていたのがゾーグ先生でした。ゾーグ先生は、神学部合同のメリットとデメリットを論じています（「キャッセルマン宛て書簡　1935年１月22日」『学院100年史』本篇836頁以下、資料篇745頁以下参照）。特筆すべきことは、神学部合同が、神学教育の一層の充実や超教派的教会協力に利する一方で、東北学院から神学部がなくなることで、東北の地域的独自性に理解を持ち、東北学院への愛着を持った牧師を養成することが困難になってしまうという指摘です。

ゾーグ先生の書簡にも表れているキリスト教を建学の理念としつつ、東北の地域的特性を踏まえた学問の発展と、東北の地に貢献する人材の養成というヴィジョンは、当時の宣教師たちの共通したものでした。このヴィジョンを、どのように継承していくか。これは今日的課題でもあると言えるでしょう。最後になりますが今年度の間、連載してきた本コラムも、今回で終わります。１年間ありがとうございました。

（大学宗教主任　藤野 雄大）

訂正：水曜通信34号掲載「宣教師たちの生涯と思想（10）」に記されている、E・H・ゾーグ「音楽の力」は『東北**学院**時報』第201号ではなく、正しくは『東北**教会**時報』第201号所収のものでした。お詫びして訂正いたします。

― 建築が語る東北学院の歴史（26）―

第二次大戦期の東北学院には一時的に工業専門学校が設けられましたが、恒常的なものとはなりませんでした。一方、戦後になると国土の復興・開発を支える理工系技術者の養成が急がれましたが、東北地方では「私立の理工系大学なく…（中略）…国立の理工系大学卒業者は殆んど中央に就職して地元に残留するもの皆無の状況」が続きました。昭和36年９月に東北学院より文部省（当時）に提出された工学部の設置認可申請書には、工業系企業が集積する塩竈に近接し、且つ工場誘致が進められつつある多賀城に工学部を設置する意義と理由について、第一に「実習実験に便宜」、第二に「相互技術研究提携を行う等所謂産学協同」の面で有利、そして第三に海軍工廠跡地に関する財務局との交渉結実を挙げています。

下の図１は、払い下げ前の敷地です。駐留軍の軍属や将校の住宅がゆったりと建つ様子が見えます。一角にはプールも設けられています（現在の公務員宿舎の敷地にあたります）。

同じく図２は設置認可申請書に添付された敷地設計図、図３は「払下げ土地建物等利用計画図」です。開設時には複数の旧駐留軍施設が校舎に転用されたことや、第一期工事として３号館が計画されていることを読み取れます。

（工学部　﨑山 俊雄）

図１　取得前の旧多賀城校地
（国立公文書館所蔵図を一部トリミング）

図２　設置認可申請書添付の
多賀城キャンパス敷地図（同左）

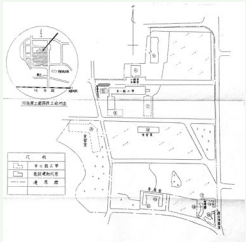


図３　設置認可申請書添付の
払下げ土地建物等利用計画図（同左）

東北学院宗教センター発足４年の歩み

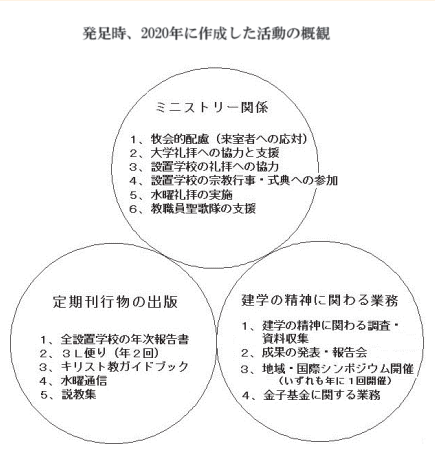
センターチャプレンを退任するにあたって　野 村　信

東北学院宗教センターは、2020年４月に発足しました。それまで何度か設置要請の声が上がりましたが、松本宣郎前理事長のもとで詳細な検討が進められて実現に至りました。しかし、折しもコロナウイルス感染症がこの年の２月頃から広がり始め、各学校の授業も礼拝も遠隔や動画配信などを余儀なくされました。対面での活動が制限され、stay home の掛け声の下、外出もままならず、センター構成員を十分確保できない中での出発となりました。

宗教センターが設置された主な目的は三つあります。それは現在軌道に乗せつつありますが、一つに、一番在籍数の多い大学生に対するキャンパス・ミニストリーを活発に実施したいということと、もう一つは、点在する各学校のキリスト教活動をゆるやかにまとめ、東北学院の宗教教育に一貫性をもたせたいと願ったからです。そのために感染対策を施しつつ礼拝、祈祷会による交流活動を開始し、各学校に同一の印刷物を配布し始めました。

第三番目の目的は、ちょうど文部科学省の私立大学ブランディング事業の支援が一年早く終了したために、そこで実行されていた幾つかの企画を本センターが継承したことです。事業の下で進められていたランカスター神学校との国際交流協定は、2018年に締結されましたが、本センターの三番目の活動の柱となりました。

コロナ禍も下火になり始めたころ、センター発足３年目にして、ようやく宗教センターチャプレンが就任し、翌年、すなわち昨年ですが、センター主事も採用され、こうしてセンター構成員が全員揃いました。大学生を主にしたTGCF（Tohoku Gakuin Christian Fellowship）も昨年から活発に活動を開始し、センターの第一目標を順調に軌道に乗せることが出来ました。



これからのセンターの活動は、三つの目標を引き続き活発に実行し、本学のキリスト教教育を通して在籍する園児から大学生に至るまで、各自が豊かな人格教育を受けられるように整えることが望まれます。各校で毎日捧げられる礼拝と聖書に基づくキリスト教の授業、さらに個々人が自由に参加できるキリスト教活動が盛んになることが、これからの時代に必要です。

（宗教センターチャプレン　野村 信）

LIFE LIGHT LOVE SINCE 1886

いのち　ひかり　あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE（いのち・ひかり・あい）

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第35号
2024年２月７日発行
〒984-8588　仙台市若林区清水小路３-１
発行責任者：宗教センター主任　原田 浩司
東北学院宗教センター　TEL：022-354-8310
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp